

人と牛の共生共活

三重県伊賀市 ヤマギシズム春日農事組合法人・春日実頭地 柳 文夫さん

三重県伊賀市の東部に位置するヤマギシズム春日農事組合法人は、県内でも有数の生産量を誇る大規模農場。ここでは、共同生活を営む20人が、酪農に従事している。彼らの理念は「共生共活」で、酪農に関しても「人とのつながりのなかで、牛を飼う」と考え、日々の作業に取り組んでいる。



【概要】

- 経産牛350頭、育成牛240頭、F1 120頭
- 経産牛1頭当たり乳量31kg/日
- スタッフ20人（うち酪農従事16人）

【基本方針】

- ①人と牛の共生共活
- ②「この人しかできない」という仕事を作らない
- ③牛の自主性を尊重する



「人と牛との適切なバランスが大切」という柳さん



毎朝のミーティングで牛の情報を共有する。ここで乳牛のための管理改善が提案される

よく観察するが 過剰な関わりはしない

柳さんら養牛部(酪農担当グループ)のメンバーが口を揃えるのは、「いつ牛舎にいても牛が静か」だということ。人に慣れ、穏やかな牛群を作るために、彼らがとくに注目するのが、哺育・育成期だ。

その頃の接し方のポイントを聞くと、「よく目を配り、異常がないかを常に観察するけれど、過剰な関わりは持たない」と答える。というのは、過去に、ある牛がかわいいうまわり愛玩動物のように扱ってしまい、管理や生産性に問題を抱えたこ

とがあったからだ。

管理面では、必要以上に人に懐いた牛は誘導が難しかった。そして生産面では、なぜか人に懐きすぎた牛の生産性が低かったと実感した。

現在は特定の個体を特別扱いは避けて、子牛を平等に扱うようにした。

そこで、「過剰な関わりを持たない」としたわけだが、言い換えれば「人と牛との適切な距離」を目指したことになる。その結果、育成期には適度な逃避距離を持てるようになり、牛の誘導はスムーズになった。この時期、適度な距離感を持つことで、その後の牛群管理がスムーズにいくようになるかと考えている。

牛と人の
良好な関係を築くポイント



高床ユニット式のハッチもスタッフの発案。給水器も簡単に分解できるので、清潔な哺育環境を保つことができる

牛の自主性に任せる

ヤマギシズムでは乳牛に対して「やってはならないこと」として、①叩く、②脅かすを共有している。これは多くの牧場で共通する決まりごとだが、さらに③牛の自主性に任せる、という考え方がある。

例えば、搾乳時のパーラーへの誘導では、あくまで牛自身が習慣としてパーラーへ移動するように、行動を覚えてもらう。初産分娩直後など搾乳に不慣れな牛は、群の中ほどに入るように誘導する牛群をコントロールすることで、経産牛の後をついていき、搾乳と移動を覚えさせる。その結果、初産牛でも搾乳開始後3日程度で、パーラー搾乳とパーラーへの移動に慣れるという。

誘導は牛への声掛けが基本で、決して力づくで“追う”ことはしない。

暑熱期には、朝夕の搾乳の間、ちょうど昼過ぎ頃にパーラーの待機場場でシャワーを浴びさせて暑熱対策をしているが、ここでも牛達は、シャワーの時間になると、自主的に待機場場に向かうので手はかからないという。

拘束は最小限で 作業は見えるように

搾乳牛の治療や削蹄、妊娠鑑定は、パーラーの



育成牛群。同一の群で成長ステージを進んでいく

戻り通路に設置したキャッチベンで行なっている。最大収容頭数は20頭。キャッチベンには削蹄用保定枠を常設して、牛はパーラーへの往復時に、常に保定枠を認識していることになる。「常に目に入るためか、いつもあるものとして捉えて、特別な恐怖感を感じていないようだ」と柳さんは言う。

キャッチベンでは、搾乳を終えた牛達が迅速に治療・削蹄を受ける。そのため、治療などを行なう時間は搾乳時間が基本になる。キャッチベンに拘束する時間を最小限に留め、牛達のストレスや恐怖を軽減するのが狙いだ。